



昭和45年(1970年)
12月号 (No. 306)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文	
ヒンズークシュ 1970	1
秋田H.K.登山隊	1
世界登山家名鑑	1
滋賀山岳連盟隊	2
蒲郡山の会隊	3
長崎大隊	4
千客万来	吉沢一郎 5
アドルフ老からの便り	6
ガルワールの地図	6
冠松次郎氏追悼会	7
第三回山岳図書交換即売会	8
出品目録	8
尾瀬でなめこを食べる会	9
会員通信	
台湾玉山登頂記	伊藤博夫 7
図書室便り	
図書受入報告	9
定期刊行物受入報告	9
10月到着外国雑誌	9
寄贈図書	9
購入図書	10
図書委員会報告	10
会務報告	
11月理事評議員会	10
会員異動	
住所変更	10
新入会員	11
その他	
忘年会のお知らせ	11
第二回H.K.会議のこと	2

ヒンズー・クシュ

1970

そろそろ、今年(一九七〇年)のやその他の報告、仮連絡が終りに近づいて来たので、整理のついでに順にご紹介したいところと思う。皆夫々にいいところを見つけて登っている。(吉沢)

A 中部H・K

一、秋田H.K.登山隊

隊員 平沢健治(隊長、32)、荘司昭夫(副隊長、28)、島山正昭(27)、藤原優太郎(26)、大里祐一(医療、34)、金田正樹(岩手医大、24)。

往路経由地 羽田、香港、バンコック、カルカッタ、カトマンズ、デリー、カール。カール、ジャララバード、チャガサライ、モノガイ、カンダイ、ウエラン峠(四七〇〇m)、イシュトカ、シャイバリ。

活動区域 マラウ谷(Darrah-i-Ma-lau)の源頭。これはフレイの地図のトグウ谷(Toghu)。

登攀活動 B.C(四五〇〇)、A.C(五〇五〇)。

マラウ峰(五七五〇)——初登、7・29、平沢、荘司、島山。

バルフ峰(五八七〇)——フレイの五七九七——初登、8・1、島山、藤原、金田。

カズン峰(五七九〇)——フレイの五七五二——初登、8・3、荘司、藤原。

シャク・イ・カブド(六一九〇)、8・3、南西稜五六〇〇のゴルより引返す、平沢、島山。

ツール・ロンドン(五七五二)——8・5、北面を五六〇〇までつめて退却、荘司、島山。

8・6、スコットランド隊がマラウ谷へ入ってきた。

帰路経由地 シャイバリ、ケロン、ラビス鉱山、ジュール、ファイザバード、クンズバード、カール(パミアン、パンディアミール見物)、タシケント、ハバロフスク、ナホトカ、横浜、秋田。

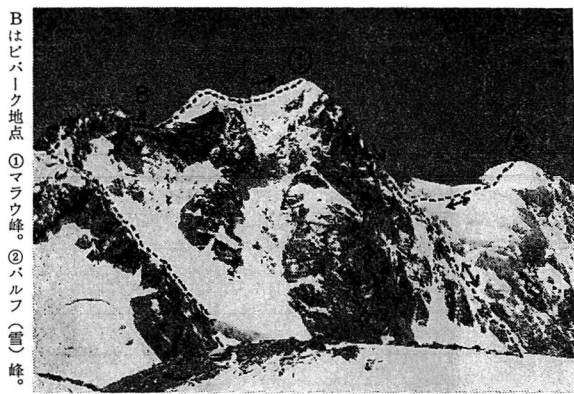
(参考)

平沢隊長から吉沢宛の手紙の中に、スコットランド隊の隊長、R・アラン・ノース博士からの仮報告書と礼状の写しが入っていた。それによると彼らの初登したのは、五七五二峰(秋田隊のツール・ロンドン)、五四二〇(アマ・ダブラム)、五四二〇、五七〇〇(マッターホルン)、五六三七(双峰)、五五五五、五四八〇(双峰、長い山稜縦走)、五三二六の八峰。

再登したのはシャク・イ・カブド(六一九〇)、南面クルールによる新ルート、五五九〇の二峰。計一〇峰。

このあと南隣のジュンメー谷(Jouneh)の源頭に入り、隈なくこれを探ったが、コー・イ・モンディの北壁(一二二〇〇m)が素晴らしいという。

尚この隊はシャイバリにつく以前の七月二四日に、重要登山用具を担がせた馬を急流にさらわれ、ガックリしたままマラウ谷へ入ってきた(フレイに教わってきたらしい)が、幸いにも登山活動を終えた秋田隊に遇



Bはビバーク地点。①マラウ峰。②バルフ(雪)峰。

英国はチェンジャーに住むG・ブリッジという人から消印一〇月二八日(日本人でもこの頃日付のない手紙をくれる人がよくある、記録をするのに困るから要注意)の手紙が来た。

世界登山家名鑑(一七五〇—一九七〇)というのを出すことになった。世界的に不公平のないようにしたいし、そのために五〇人ぐらいのスペースがあるのでお選び頂けないか、という内容であった。

二〇人位はスラスラと選んでもあとが大変だ。女性もいいが洩らすとあとがこわい。手に負えないのでT氏とY氏にも選んでもらい平均点をとって責任をばかしてしまふことを考えた。それにしても随分大変なことを考え出した人がいるのだ。しかしわれわれのようなクロニクラーには大いに参考になるものが出来るかも知れない。愉しみに待っていいよ。(吉沢)

◇世界登山家名鑑◇



秋田隊とスコットランド隊の交歓風景

A・中部H・K

二、滋賀県山岳連盟

大津山岳会

DARRAH-PINAWI

隊員 木内義忠(隊長、27)、松下征文(25)、中西俊三(22)、辻井良夫(22)、松島謙二(22)、佐藤道明(医療)。

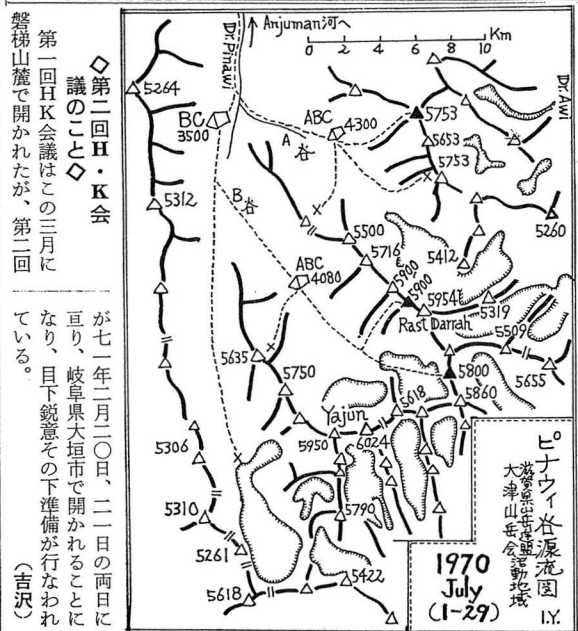
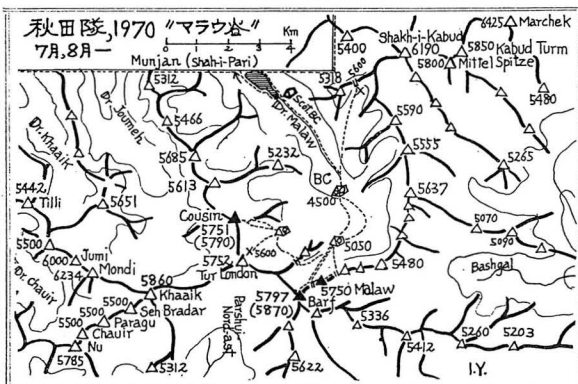
往路経由地 大阪、シベリア、タシケント、カープル、ダシテリワト、アンジニマン、ピナウイ谷。



ヤジュン峰からの北望(広島大学隊撮影, 1967) A・5900m, B・ラスト・ダラー(5954m) C・パンダカー(6843m), D・5800m峰

活動区域 ピナウイ谷のA谷、B谷、本谷。
登攀活動 BC(三〇〇〇)、A谷ABC(四三〇〇)、B谷ABC(四〇八〇)。
奥の五七五三峰(試登)、松下、中西、天候悪化で五六〇〇から下降。
手前の五七五三峰(試登)、木内、辻井、松島、同様にして五二〇〇から下降。
手前の五七五三峰(初登)、7・12、木内、中西、辻井、松島。
五六三五峰(試登)、松下、中西、辻井、時間切れで五三〇〇より下降。
五九〇〇峰(試登)、木内、松島、降雪のため四九〇〇より下降。
五八〇〇峰(初登)、松下、辻井、五九〇〇峰(初登)、木内、中西、松島、両峰とも7・22。
・右侯偵察(松下、中西)。
BC撤収、7・29。
帰路経由地 ジュルム、アズラテスサイド、ファイザバード、カープル、ガズニ、ベシヤワール、ラワルビンディ、イスラマバード、ベシヤワール、カープル、タシケント、ハバロフスク、ナホトカ、大阪。

(吉沢)



↑五八〇〇峰より見た
ヤジュン西主峰峰頂(五九五〇)
(六〇二四)

→五七五三峰アック途上
五二〇〇地点より見た
CA五九〇〇峰
DB五七九〇峰

◆第二回H・K会
議のこと
第一回H・K会議はこの三月に
磐梯山麓で開かれたが、第二回

が七一年二月二〇日、二一日の両日に
亘り、岐阜県大垣市で開かれることにな
り、目下鋭意その下準備が行なわれ
ている。
(吉沢)

Koh-i-Paghar

.....5606m.....

◆A・中部H・K◆

三、蒲郡山の会

隊員 中瀬司(隊長、28)、石川絃一(副隊長、28)、長坂優(27)、鈴木重太郎(22)、三輪茂晴(22)、久崎真行(医師、36)。
 往路經由地 羽田、カール、ダシテリワト、アンジマン峠、ルイスウイク谷。
 活動地域 アンジマン峠の東側にあるルイスウイク谷及びその東隣りにあるバガール谷奥左岸。この谷は一九六八年に大垣隊が入って「X」峰即ち後の「シャイ・イ・アンジマン」その他の初登を行なった。

登攀活動 BC(7・8、三五〇〇)、ルイスウイク谷AC(7・12、四四〇〇)、バガール谷ピリア谷AC(7・23、四六〇〇)、同アブドル谷AC(?)。

・五〇五〇峰(7・16、全員?)。
 ・コー・イ・バガール偵察(7・17、18)——もうい

岩壁で、こちら側からは困難とわかる。
 ・バガール谷へ廻り込む(中瀬、長坂)。

・五三〇四峰(7・21)、五三七〇峰(7・22)、五二五五峰(7・24)——石川、鈴木、三輪。

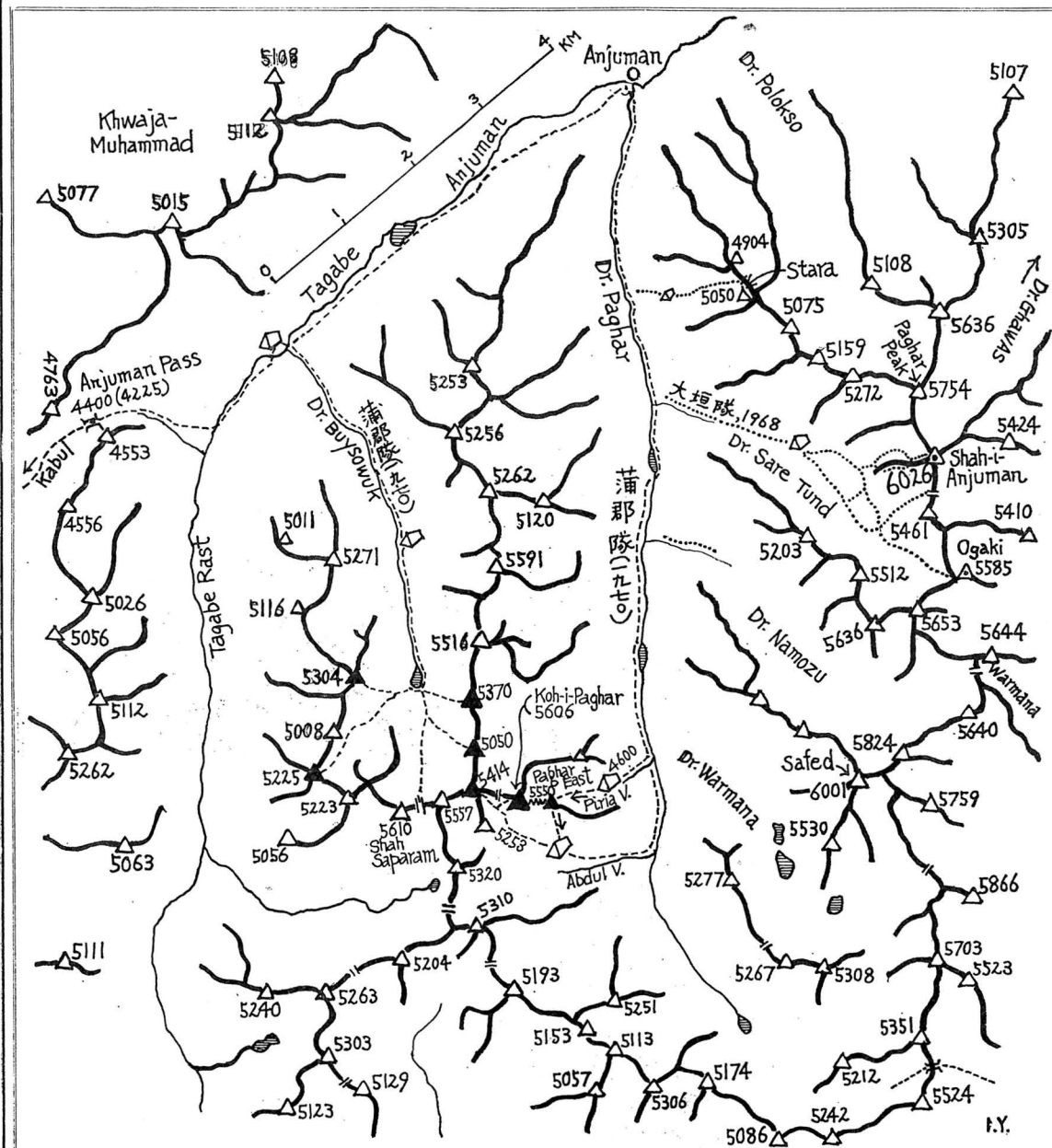
・バガール東峰(五五五〇)、7・25、北壁登攀、五四〇にてピバーク。アブドル谷へ下降。

・バガール主峰(五六〇六、大垣隊のバガール・ピークとは別)、7・30、中瀬、長坂、三輪。

・五四一四峰 7・30、石川、鈴木。
 ・BC撤収(8・7)、カール着(8・11)。

帰路 カール、羽田。

◆あのビレム・ヘッケルか◆ この間、アンデスの登山年表(一五八二—一九七〇)をつくっていたら七〇年のチエコ隊全滅者の中にV. Heckeelという名を発見した。これが「Hory a Lide, 1967, "Hind Kush, 1967, "Schody pod Veamir," 1970, を出版しているヘッケルだったら大変なニュースである。(後記・どうもそうらしい)(吉沢)



A・中部HK

四、長崎大学士山岳会

バンダコー

新登頂

◇

隊員 一瀬義典(隊長、36)、溝上春見

(副隊長、30)、大塚大(写真42)。

中尾勤悟(36)、松尾司(29)、橋崎

純雄(26)、前波政昭(25)、森本勲

夫(25)、猪俣敦子(24)。

往路経由地 カルカタ、ニュー・デ

リ、カール、ダシテレワト、ア

ンジュマン、ケロン。

活動地域 バンダコー山塊

登攀活動・BC(四二〇〇)、サキ谷に

入り、バンダコー主峰

・7・25。

・(一)サキ谷隊と(二)南水河隊に

分れて偵察。(二)は雪少なく岩露

出、いやらしい。

・7・27から荷上げ開始、CI(五一

六〇)、CII(五八五〇)、CIII(六

三二〇)と設置。

・8・7、氷硬くアタック失敗。(森

本、溝上)。

・8・14、溝上、橋崎、森本、CIIIより

東壁上部山稜経由、バンダコー主

峰新登頂。南西稜下降、途中六六〇

〇にビバークしてBCに戻る。

・8・19、帰路につく、北廻りでカ

ブル着(8・29)。

バンダコー主峰東稜CIII(六三二〇)

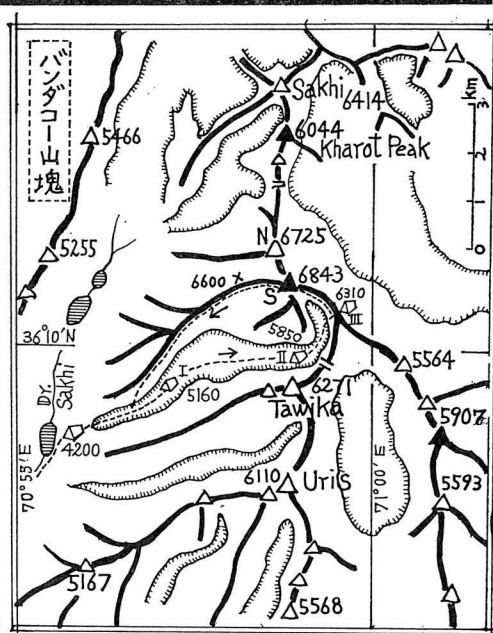
より東方に東部HKを望む。右の大き

いのがティリッ・ミール(七七〇

八)、中央の梯形がイストル・オ・ナ

ール(七四〇三)、左の高いのがノシ

ヤック(七四九二)の塊まり。われわ



←CIII(6310m)より仰いだ頂上へのルート。Aは第一回目のルート。Bは第二回目のルート。C, D間に180mの固定ザイルを張った。E点にサミッターの姿が見える。Fの雪庇は思ったより簡単に越すことが出来た。左手の尾根が南西稜。これを下降中、ドイツ人3人、フランス人3人の2隊にあう。前者は登頂、後者は6400mあたりから引返したらしい。バンダコーの東壁は今後に残された最大の問題だが、殆んど絶望的な印象をうけたという。

←CIIIよりの南望。写真は総て長崎大隊の撮影。

千客万来

吉沢一郎

この夏は万博という特別なものもあったせいか、海外の登山家が大部日本を訪れたが、十月に入ってやや下火になった。

私が直接間接に応待したり、一緒に歩いたりした人々はざっと次の通りである。

- ・ Edmund P. Hillary and Louise (NZ)
- ・ Hayat Ahmad Khan (Pakistan)
- ・ Leo Murray (Hongkong)
- ・ Ferrante Massa (Italy)
- ・ Binaya Gur-Acharya (Nepal)
- ・ Udo Lottes (West Germany)
- ・ Miss Gertrude Smith (Canada)
- ・ Bruce Beck (USA)
- ・ Lewis Clark (〃)
- ・ Fritz H. Wessner (〃)
- ・ Frank H. Sternquist (〃)
- ・ Jim Eder (〃)

よくまあこれだけお出でになったものと思うが、それだけ日本山岳会というものの存在が世界的の度を増して来たのだから、やはりご同慶の至りということになるであろう。

だが矢張り相手は人間だからいろんな人がいる。面白かったのか愉しかったのか、それともつまらなかったのかはわからないが、帰国してしまっただけなのに何も言っていないものもある。世話の焼き甲斐のないこと、張合いのないこと甚だしい訳なのだが、こんなのは日本から海外へ行った登山家(?)の中にも沢山いるのだから、お互いさまでと言えないこともない。まあこんなことでいきり立つのは止めにしておこ

う。

中には、何月何日に羽田へ着くから、出来たらホテルを予約しておいてくれ、それもあるべく安いところを、などと言ってくるものもある。どうにか探してわざわざ羽田に迎えに行き、ホテルまで連れて行って、翌日はカメラの付属品を買いに一緒に行ったりし、とても喜ばれたこともあるが、折角ホテルを予約してやったのに、あとから計画を変えたから断わってくれと言ってきたものもある。全くやりきれない。

ニー・ヨークにいる人からの紹介で来た登山家が酒沢へ行ってたまたま JCCC の人達の世話になった。別に依頼状を持たせた訳ではないのだが、私のことを言っていたものだから JCCC の人達も好意で世話をしてくれたらしい。しかし費用などはどうなっているのかよくわからない。もし迷惑でもかかっているなら誠に申し訳ないと思っている。こんなのも全く困りものである。

また中には折角好意で案内役をつけてやったのに費用を割勘でやった人もある。私は腹が立ったので全部君の方で負担せよといつてやったら、一〇ドルだけあとで送ってきた。無暗に人の世話も出来ない。

スイスのある有名な登山家は自分が行くからと言っておきながらドタン場になって、自分は都合で行けなくなつたが、観光団がそちらへ行く、中に六、七人富士山へ登るのがいるからよろしく、と言ってきた。その後彼から富士山に登った人からも梨のつぼみ、外国の有名な登山家にもこういう礼儀知らずのチャッカリ屋がいるということとは覚えていてもよい。神戸の津田君

などもひどい目にあった一人である。この頃では私もだんだん削口になって来て、特別の場合以外、経費はそちら持ち、日本へ来てからのスケジュールの変更はまかりならんと厳重に連絡しておくようになった。われわれも毅然たる態度をとる必要がある。

それはそれとして最近一応印象深かった人の来日について簡単に報告しておこう。

◆ ハヤット・アーマッド・カーン

ハヤット氏は一九二一年九月一日生れだから今年は四九才だ。商売は貿易商らしい。東京へ来ても日商その他の会社と連絡していた。

山の方では一九三六年に創立された The Karakoram Club, Pakistan の名誉秘書をやっている。この会長は、Hamid Ahmad Khan 教授(前世紀の最後の日に誕生)でベックは一九五六年、五七年、六二年の京都大学隊に三回とも同行している。ハヤットの方は六二年隊だけに参加している。この時、今外務省にいてわれわれと密接な関係にある牧内氏はスカルドゥまで行ったそうだ。

カラコラム・クラブには現在会員三〇〇名、名誉会員二〇名があり、パキスタンに關係の深い外国の有名な登山

家は大概名誉会員になっているとのこと。私はパキスタンへ行ったことはないが、どうやらその名誉会員に推されたいらしい。有難いことである。

ハヤット氏は九月八日に日商から私のところへ電話をかけてきたが、富士山へ登りたいというので八王子の高島三朗君(JACC 及び秀峰山岳会)に連絡し、その世話を頼んだ。彼は心良く承知し、仲間を集め車まで用意して八合目辺りまで(天気悪い)奥さんとも登らせてくれた。ハヤット氏がとても感謝していたことは言うまでもない。

私は彼から面白いことを二、三聞き出した。その一つはナング・パルバット山群にあるラキオット峰(七〇七〇m)のことである。横文字で書くと Rakhio となっているこの名称は一九三三年の初登以来三八年間使われてきているが、ハヤットによると、この言葉はライコット(Raihot, バルティ語)が正しく、その意味は「お館さん」位になるらしい。ライは敬称で「ミスター」に当り、コットは「住んでいる場所」(living place)ということ。次はライコット氷河の北端にある「お廟の牧地」(Mikchen wiese, Fairland)のことだ。これも三二年隊がつけた名称であるが、ここにはバルティ語で「鬚」という土地名があるということである。昔の濃い羊飼いが shepherd がここに住んでいたところから来ているらしい。但し富士山でのハヤット氏夫妻



富士山でのハヤット氏夫妻

ブンゴトリの中の t は d かも知れないかと付け加えていた。

もう一つ、K2 の別名として Chomolungma というのが紹介されているが、これはチョウが「大」で、ゴリは、「美しい」ということで、結局「Big White Mountain」という意味になると思う、ハヤット氏は言っていた。

こんなことは皆さん既にご存知のことであつたかも知れないが、念のため記しておいた次第である。

今、カラチに石川島造船の社員として駐在している私の後輩中村保君(一九六一年のアンデス隊員)はハヤット氏の親友で、彼が東京へ来ることはずっと前に知らせてきていたのである。ハヤット氏は今までにこんなに親切にされたことはなかったとえらい感激をして帰国していった。こんなことが今後の日々関係に少しでも役に立つことがあれば、皆の骨折りも無駄にはならないということになろう。

◆ ガートルード・スミス女史

カナダ山岳会のバディ・シャーマン(昨年、ワスカランを西稜から新登頂した)とワディントン峰に縁の深い、フリス・マンデー女史の紹介でやって来たスミス女史は一九〇九年生れのおばあちゃん(六九才)だが、現在は学校の先生をしながら、ACC のバンクーバー支部長をやっている。

山歴は?と聞いたら、一九五〇年頃から山を登っており、コロラド州の四三〇〇m 級五峰、カナダではフォーブス、エデス・キャベル、サマー・キヤンパー〇回参加、アルプスではマッターホルン、エンゲフラウ、一九六七年にはユーコンで登山をやったという小さくてしわくちゃなおばあちゃんだがなかなか愛嬌がある。

東京での世話は女性だから斎藤桂さんその他の人々に連絡してもらいたい。

お寿司を旨くたべるスミス女史



ルームで歓迎会をした時には、今井雄二御夫妻をはじめ、カナダへ行ったことのある早稲田の根元さんら、これから行こうとしている人達など三〇人以上が集まったが、その殆んどが女性であった。

山の人は山の人に会いたいらしく、大勢の観光団と一緒に来たのだが、一人だけ何とか抜け出して来ては女性達と話し合っていたらしい。

フリッツ・H・ウィスナー

一九六八年にロンドンとNYで会ったフリッツがとうとう東京へやってきた。彼の一代記については「山と溪谷」(本年二月号)に詳しく載せてあるのを参照して頂きたいが、知らない人もいるらしいので一応その山歴を紹介しておこう。

彼はドイツのドレスデンで一九〇〇年二月二六日に生れた。アメリカ帰化は一九二六年以前らしい。現在の家族構成は次の通り。

Fritz Herman Ernst Wiessner

(70)



Muriel Schoonmaker (55)
Andrew Fritz (24)
Pauline Wilson (22)

今度日本へ来たのは奥さんと息子のアンディだけであった。

山歴 (現在AACをはじめ多くの山岳会の名誉会員、UIAAでは国際グレイディング委員会の委員長)

一八才の頃からアルプスやドロミテで素晴らしい岩登りをやっている。フライシュベングの南東壁は美事)

現在アメリカ人で、アルプスの四〇〇m級を全部登っているのは彼一人だけらしい。

一九三二年、ナंगा・バルバット、一九三六年、カナダのウオディントン峰(四〇四一m)初登攀。

一九三八年、カナディアン・ロッキーズのTwins Towerの北峰の北峰(三五九八m)の初登。

一九三九年、K2において頂下二〇〇mまで肉迫した。

彼は現在カナダの国境に近いバーモント州のストウに住んでいるが、実業界では現役を退き、好きな時に好きな

ところへ行けるいい身分になっており、アンディは法律家を目指し、ポーリン嬢はミシガン大学で人類学と考古学を研究しているという。いずれにしろ経済的には苦勞のない一家らしい。

前に手紙は来ていたが、九月一日の夜、ヒルトン・ホテルから電話。来ましたよ、明日会いたい、という。それからいろいろな計画が検討された。富士山が見たいというので、高橋照、加藤幸彦の両君に車を二台出してもらい、山中湖まで行っているのだとしても二台ではダメなのだ。高橋、加藤の両君も心よく自前で案内してくれた。一日小雨で富士は半分以上上は見えなかったが皆とても愉し気であった。

To the Japanese Alpine Club

with all good wishes for further great
success and with many thanks for
their warmest hospitality extended to us

Fritz H. Wiessner
Muriel S. Wiessner
Sept. 22, 1970

Contribution from Nagasaki Tokyo
John J. Johnson
Vice President of the J.A.C.

次は上高地行きである。切符は例によって渡辺公平君に頼んだが、今度はいずれ面倒をかけてしまった。相済まなく思っている。

長野の人達との連絡は照さんに頼んだ。これも車二台を提供してくれたばかりでなく、同姓同名でお互いに迷惑(?)している吉沢一郎君、横地、丸山、山岸君といった愉快な人達が、商売をほっぽらかして案内役を買って出てくれた。本当に有難い人達である。

私は三〇年振りの上高地なので、そこといひ沿道といひ。その変わり方についてくりしてしまつた。ウェストンのレリナイにも初めてお目にかかったのではないかと思う。

九月二〇日は九日振りの晴天だったという。西穂の独標まで登る。フリッツは裸だ。私より三つ上だがとてもかなわぬ。長野の連中は口は悪いが優しい山男ばかりである。私の下手な英語より彼らのシエルバ英語の方が通じがよいのも愉快である。私はいつも奥さんと一緒に歩いていた。足並みが丁度合うからだ。

松本経由、犀川沿いに長野市へ、信毎で対談。善光寺見学、大峰城から夜

の長野市俯瞰、スキ焼の接待。到れり尽せりの好意に甘えたまま、翌日町田君の車で長野駅へ。おつき合ひして下さった諸君の見送りをうけてそこをあとにした。関東平野におりる前の沿線の緑の風景は彼らを充分に楽しませたようである。

◇アドルフ老からの便り◇

老友吉沢兄その後は如何。一九七〇年のHK関係概報を送ります。詳細はいずれ後便にて。

- 一、奥、G.V.H. (隊長、カジ・デー谷、ノシヤック、アスベ・サフェドI、II、III (初登)、コルブシニエ・ヤキ、ラケ・ミヤニ西峰、東峰 (初登)。
- 二、奥スキー隊、コルブシニエ・ヤキ及びノシヤックのスキー登山。
- 三、チニコ隊、カンズーダ谷。
- 四、ユーゴ隊、マンダラス谷。
- 五、西独隊 (H. Fath) イシニムルグのチャプドラ谷、ドゥステイ主峰 (初登) 他。
- 六、スコットランド隊、ワハン。
- 七、西独隊 (Seit Rauch) 、チトラル、隊長疲労死。
- 八、奥、デイール谷、ケルントナール支稜及びS水河峰越えルートも不可能。悪天。
- 九、フランス隊、ワハン。
- 一〇、奥、ラスブル源流。
- 一一、奥、ノシヤック又は中部HK一一、伊 (Burbacia) 、ノシヤック北峰、ダルバン水河の北端二峰。
- 一二、奥、K6。
- 一三、奥、K6。
- 一四、奥、ロイツェ・シャル。
- 一五、奥、ルパール壁。

◇

仏隊は69年にラホゾン北峰に登頂しなかった。南面からの奥隊成功。ゴーカール峰の初登は68年の奥隊。ビネリ隊はその西峰だったらしい。

冠松次郎氏追悼会

本会名誉会員冠松次郎氏をしのぶ会が十月十四日午後六時から本会ルームで開かれた。故人の令息郁夫氏とともに御出席を願ひ、故人がお茶の水のルーム時代土曜会の忘年会で元氣にうたわれた詩吟や、小集会での「黒部の今昔」という講演などのテープに耳をかたむけながら、秋の一夜をしみみりと故人の面影をしのんだ。

「暖くなってから冠さんのお宅に出張して土曜会を開こうと思っていましたが、お亡くなりになられてまことに心残りである。きょうは冠さんとともに親しくしていただいていた方々にお集りを願ったが、冠さんの仲間でいとお元氣に出席されているのは岩永さんだけで、別宮さんも沼井さんも皆お亡くなりになってしまふまことに淋しい。冠さんはしかし八十八歳という長寿を全うされしかも立派な『山溪記』五巻を遺されて大往生されたのはたいへんうらやましい」との神谷世話人のあいさつにつづいて冠郁夫氏は「長くロンドンにいた私を父は頭を長くして待っており、この六月帰国したときはとても喜び、それからあまり食事もとらなくなり、七月末眠るように亡くなったが、私は七人兄弟で上に男が三人、女が三人いて、上の兄が皆死んだので末っ子の私が父を見とこになつた。私は父が四十二歳のときに生れ、子供のころ父と一緒に山に行き、一高時代も山登りをしたが、生前父に親しくされていた方々にこの席上お礼申しあげると父親としての冠松次郎氏についてふれ、岩永氏は黒部下廊下を初めて冠さんと歩かれた当時の思い出を話され、五十年にわたる冠さんとのおつき合いの思い出としておしまいになったと述べられた。

三田、村井、日高、佐々の諸氏からもそれぞれ思い出話が披露され、藤島氏は「冠さんの早期の山岳に出された記事には写真がないので、写真を撮さない人と思っていたが、震災前後から冠さんも写真をやるようになった。フィルムとはどんなものか、あけて見たという時代で、フィルムを開いてみたといわれていたのは冠さんではなく、実は私で、写真では私の方が冠さんより先輩である。はじめの冠さんの印象はアクの強い人であった。これは悪い意味ではなく、年をとるとともに好々爺になっていく。文章も若いころと晩年とはたいへん変化があり、はじめのころのものは漢字のやたらに多い文章だったが、年とともにあか抜けてきた。好々爺でニヤカになられた冠さんにもうお目にかけられなくなったのは本当に残念である」と故人のエピソードを混え、ふだんの藤島さんに似ないしみりした調子で故人をしのびられた。

ごく内輪の方々だけにお集りいただいたのだが、それだけに落着いた雰囲気故に故人をしのぶことが出来た。なおテープの再生に御尽力いただいた鈴木氏、テープを持参された古沢氏にお礼申し上げたい。(山崎)

△出席者 冠郁夫、神谷泰、日高信六郎、三田幸夫、川崎精雄、藤島敏夫、佐々保雄、岩永信雄、村井幸子、斎藤かつら、松本熊次郎、瀬名利利、島田興、諸岡一、望月達夫、古沢肇、鈴木郭之、石原憲治、織内信彦、川上隆山崎安治、吉沢一郎。

第二六五回小集会 第二六五回小集会は十月二十二日午後六時半から向井ビル四階で会員崎英子氏らの「アナンブルナ三峰登山報告」および会員野村哲也氏の「ダウラギリ六峰登山報告」があり、スライドを上映してそれぞれ興味深い報告であった。出席者五十五名。

会員通信

台湾玉山登山記

伊藤 博 夫

私共沖電気芝浦山岳部は一昨年創立十五周年を迎え、その記念事業の一環として初の海外登山を計画、台湾の玉山に登山隊を派遣致しました。メンバーは六名で十日間のあまたしい旅ではありましたが、忘れ難い思い出となりました。

四月二十九日夜羽田を発ち、深夜の小雨のけふる台北空港に第一歩を印しました。空港には深夜にもかかわらず台湾省山岳協会の林樹封、林南園、陳守珪氏の出迎えを受け、暖かく歓迎されました。翌三十日はまず日本大使館を訪れ挨拶した後、台湾省山岳協会を訪問致しました。ルームの壁には訪華登山隊の記念ペナントがところ狭しと貼られてあり、しかもそのほとんどが日本隊のものであり、あまりの多さに驚いた次第です。折しも九州の延岡山岳会隊が雪山から下山して来、また東京の大和運輸山岳部の三名の玉山隊も来台し、まだこれからも続々と人山申請が来ているとの話でした。

私達とちようど行き違いに主任委員の周百鍊氏ら主な方々が日本へ来られたので、王雲卿、林南園、陳守珪氏にいろいろのお世話戴き玉山登山について打ち合わせを行ないました。玉山には山岳協会野中隊員で、小学校の先生をしていただける林志郎氏が同行されることになりました。台湾は非常に食べ物豊富で値段も安く、日本人好みの調味料以外の食料は全部現地調達致しました。

玉山につきましてはいまさら詳しく書くほどのこともないと思いますので簡単に記しますと、五月二日に入山許可が下り、台北発十二時の観光特急号で一路嘉義へ向かいました。台湾の鉄道のサービスのよさは噂さには聞いて行きましたが実際にその通りで、美人のホステスが新聞やおしぼり、お茶を無料でサービスしてくれまし、初めて見る南国の車窓風景とあいまって快適そのものでした。

嘉義は玉山周辺から出る豊富な木材の集積地で家の作りや町並みも日本そっくりで、四十才以上の人は流暢に日本語を話しますのでいさゝか異国情緒が薄れるところです。

三日は阿里山鉄道で阿里山へ登りました。阿里山鉄道は中興号という観光急行のジーゼルカーが走っており、例によってホステスが湯茶などのサービスをしてくれまして登山鉄道とは思えない楽しい旅ができ、本当に台湾の乗り物のサービスの良さは感心致しました。名物の縦型ビストンの蒸気機関車もまだ走っておりまして、姿を消すのは時間の問題とのことでした。阿里山に一泊して四日、この機関車の引く森林軌道に乗り換えて、沿線のシャクナゲやススキを楽しみながら、遠くたびたび見え隠れする玉山に胸をときめかせて東埔へ向かいました。

東埔からタリタカ峠までは広いトラック道で峠から登山道に入り登高が始まりますが、道は広くしっかりしており、断崖を切り崩して建築に使うような立派な角材で棧道が作られ、私達にとってはいさゝか物足りないような立派な道でした。それに東埔から玉山の頂上まで地名と距離を書き込んだ鉄製の大きな指導標が立てられており、地図さえも要らないような有様でした。しかしさすがに山は大きく谷は深く森林限界も高く、直径一m以上もあるタインツツガやニイタカアカマツの原生

林は、ちよつと日本では見られない美事でした。

標高三三〇〇mのニイタカドマツの林の中に建設費八百万円をかけたという排雲山荘があり、入口を入るとビーにはソファまで用意されており、壁は日本隊のペナントで一杯でした。約百名収容出来ることでしたがカバの付いた蒲団、水洗便所も完備しており、日本の山でもちよつと見られないくらい立派な小屋でした。それに小屋の手前と上の道が二百m程コンクリート舗装までしてある念の入れたには驚きました。

五日午前四時頂上を目指して小屋を出発しました。三七〇〇mくらいから森林限界となり代わってニイタカビヤクシン帯となります。間ノ岳から北岳へ向かうようなガレ場を登り五時三十分全員無事頂上に達しました。快晴に恵まれ三六〇度の展望を楽しみました。秀姑巒山やマボラス山を間近に見ながら登れないのはまことに残念でした。頂上からの眺望はちよつと日本の南アルプスと錯覚するくらいよく似ており、雪は沢すじに少し残っておりました。出来れば東南西北の四山も登りたかったのですが時間の都合がつかず、ニバーティに分れて東山と北山に登りました。東山はビヤクシンこぎや適当な岩登りもあって楽しい山でした。

◇ガールワイルの一五万◇

スイス財団で印刷発行したガールワイル東部の地図をお持ちの方も多いと思うが新しく入ったので頒けする。定価二九〇〇円、会員五分引、送料とも三〇〇〇円。部数が少ないので申込み順にしたい。尚、西部(一五万)が一枚(私有物)あるが、これをどうするかは目下考慮中。(吉沢)

第三回山岳図書交換即売会 図書委員会

第三回山岳図書交換即売会は十月二十四日午後三時から本会ルームで開かれた。出品数は和書一七冊、洋書二冊、その他雑誌類で、和書ではスウィス日記、ハイランド、日本山嶽志原本など珍品がずらりと並んだ。また雑誌では山岳や会報の古いバックナンバーが出品され垂涎のまことになった。図書委員会では十月二十一日の委員会で売価を決めたがその基準をいまだここで説明しておきたい。

現在山岳図書は古書店で非常な高価が付されているが、本会の図書交換会ではむしろそんな高価を付けるわけにはいかない。たとえば、一万円で古書店に並んでいる本でも、いざこれを売却する段になると、その半価以下である。そこで図書委員会では現在の古書店頭の相場半値プラス・アルファを基準に売値を決定した。各委員知恵をしばって決定した価格が別項の目録であるが、とくに山岳の古い号などの値ぶみはむずかしかった。現在山岳のバックナンバーはほとんど値が上がつているので処分されたいと思われる方は来年のこの会に是非出品していただきたい。

各出品書には番号を付し、最初その番号を係りに申し出てもらい、午後四時半締め切りで例年通り、重複品は抽選を行なった。鳥水の山岳文学は最高の十五人、山谷放浪記と会報一五十一号、二百号にそれぞれ十一人、チゴリザ登頂十人といずれも激戦となった。引きは大変なぎわいであった。最高値のスウィス日記やハイランドもたまち会場から姿を消し、こしのこの集りもまことに盛会に終わった。なお売り上げ金の五分を図書基金と

出品目録

して会に寄付していただいた。出品された各位にあらためてお礼申し上げます。
(山崎)
▽出品者武田久吉、酒井敏明、伊藤博夫、後藤博、中屋健一、横山厚夫、島田異、藤島敏男、岩永信雄、山崎安治、田辺主計、橋爪幸達、深田久弥、西村久平、三田幸夫、雁部貞夫、村井米子、神谷恭、藤井運平、吉沢一郎。

和書
農村の年中行事(武田久吉著) 竜星閣
道祖神(武田久吉著) アルス 五千円
ジャバの生活文化(ボンダー著) 竜吟社 三千円
ボルネオ(キース著) 三省堂 二五〇円
ボルネオ事情(若林文次郎著) 天理時報社 三百円
イラン紀行(ノーデン著) 東苑書房 二五〇円
ボルネオよりメッカへ(ラター著) 時代社 三五〇円
北海探検記(バーニン著) 聖紀書房 三百円
孤独(バード著) 大東出版社 二百円
アルプスの主導門次(佐藤貢著) 朝日新聞社 二百円
高原(深田久弥編) 青木書店 二百円
山と溪谷(田部重治著) 第一書房 四百円
マナスル登頂記(横有恒著) 毎日新聞社 三百円
チゴリザ登頂(桑原武夫著) 文芸春秋社 五百円
テンジンによるエベレスト征服(マラルチック著) 新潮社 二百円
ヒマラヤ登攀史(深田久弥著) 岩波新

書
ザイルのトップ(ロッシュ著) 白水社 五〇円
新入蜀記(運家麗水著) 大阪屋号書店 三百円
クレヴァス(安川茂雄著) 二玄社 三百円
山の呼ぶ声(坂部護郎著) 明文堂 五〇円
高原(串田孫一編) 有紀書房 二百円
日本山岳志(高頭式) 博文館 五百円
ハイランド(辻村伊助著) 梓書房 六千円
スウィス日記(辻村伊助著) 梓書房 八千円
モゴール族探検記(梅棹忠夫著) 岩波新書 五〇円
絵のふるさと(足立源一郎ほか) 中央公論社 三百円
日本山岳全集・アルプス(明文堂編) 二百円
青春の水河(ロッシュ著) 三笠書房 四百円
無心の山(ルー著) 明文堂 二百円
世界山岳全集八巻(明文堂) 二百円
ハイランド(辻村伊助著) 梓書房 七千円
登山地図録(山岳十年一号付録) 八百円
カラー世界の山々・山と溪谷社 四百円
日本名著全集一巻日本アルプスの登山と探検(ウェストン著) 他 三百円
一高旅行部五十年(一高) 五百円
山の気象と遭難(気象庁) 明文堂 四百円
アルプス縦走(JAC編) 実業之日本社 五百円
登山(ベースボールマガジン社) 五〇円
登山全書春山(日本山岳会編) 河出書房 五〇円
山岳文学(小島鳥水著) 太陽出版 五百円
山谷放浪記(小島鳥水著) 青木書店 八百円

山島民譚集(柳田国男) 創元社 二百円
西比利亜日記(榎本武揚著) 東北書院 三百円
ある老学徒の手記(鳥居竜蔵著) 朝日新聞社 三百円
中央亜細亜探検記(デイン著) 富山房 四百円
アルプス登攀記上下初版(ウインパー著) 岩波文庫 五百円
高山植物の観察と栽培(石井勇蔵著) 誠文堂 二百円
高山植物と山草の培養(石田文三郎、原秀雄著) 三省堂 二百円
わが山わが溪(冠松次郎著) 墨水書房 五百円
溪想(冠松次郎著) 山と溪谷社 二百円
溪谷(田部重治著) 三省堂 三百円
山への思慕(田部重治著) 鳳文書林 四百円
岳(川崎隆章編) 山と溪谷社 二百円
山日記(高須茂樹) 山雅房 二百円
岩登り(伊藤洋平著) 蘭書房 二百円
霧水園(袋一平) 岡倉書房 二百円
冬山とスキーの旅(福田源一郎著) 二見書房 四百円
山のわかれ山のであい(田中澄江著) 講談社 二百円
山の素顔(河野不二子) 時代社 四百円
登山技術(高須茂樹) 明文堂 五〇円
山林を語る(小島清著) 青木書店 五〇円
山の季節(平田佐太雄編) 昭和書房 五〇円
旅行く心(吉田絃二郎著) 新潮社 五〇円
回想の谷川岳(安川茂雄著) 現代社 五〇円
奥秩父の山々(小野幸著) 明文堂 五〇円
ヒマラヤの山々(宇野光一編) 明文堂 四百円
山(辻村太郎著) 岩波新書 二百円
山岳映画撮影同行記(町田立穂著) 休

育評論社 二百円
ローカルの旅情を探る(柏原敏子) 実業之日本社 五〇円
縦走路・冬山の徒(新田次郎) 五〇円
日光と上越・主婦と生活社 五〇円
わが心の山(日本山岳写真真集団) 角川書店 四百円
峠と高原(川崎隆章編) 河出書房 五〇円
登山実用百科(小島六郎編) 日本文芸社 五〇円
山岳講座一卷(川崎、近藤編) 白水社 五〇円
黄河源流からロブ湖へ(ブルジュワールスキー著) 白水社 三百円
ユーラシア横断紀行(アトキンソン) 白水社 三百円
内陸アジア縦断(ボンヴァロ著) 白水社 三百円
中央アジア自動車横断(ル・フェニール著) 白水社 三百円
ヨデル入門(樺山武弘著) 明文堂 五〇円
岩登りのうまくなる本(松本竜雄著) 明文堂 五〇円
登山全書夏山(日本山岳会) 河出書房 五〇円
山行歌曲集(早川義郎著) 山と溪谷社 五〇円
霧の山(安川茂雄著) 明文堂 五〇円
南アルプス(百瀬・高室著) 明文堂 五〇円
山登り(日本山岳会編) 朝日新聞社 五〇円
登山の基礎と技術(諏訪多編) 創元社 四百円
夏山入門(碓井徳蔵著) 池田書店 五〇円
競技スキー(竹節作太編) 明文堂 二〇円
このさき危険(吉沢一郎著) 二見書房 五〇円
ロシヨゴル水河の旅(山本健一郎

編)あかね書房	五百円
世界文化全集アフリカ・平凡社二百円	
夏の山の山(小島六郎著) 明玄書房	二百円
山小屋の窓(長尾宏也著) 明玄書房	五〇円
剣岳に生きる(石黒清蔵遺稿) 三百円	
藤木九三三リブ 五百円	
日本山岳名著全集・日本アルプスの登山と探検 三百円	
尾瀬と鬼怒沼ほか 三百円	
山行・スウイス日記ほか 三百円	
山・山と雪の日記ほか 三百円	
山の絵本ほか 三百円	
山に入る日ほか 三百円	
千山万岳ほか 三百円	
上高地の大将(木村種)実業之日本社	二百円
雑誌	
山岳28の3 四百円	
山岳28の1、2、3 二百円	
山岳29の1、2、3 二百円	
山岳30の1 四百円	
山岳44の2 五百円	
山岳45 五百円	
山岳52 六百円	
山岳22の3 四百円	
山岳23の3 四百円	
山岳25の1、2、3 二百円	
山岳27の1 四百円	
リョックサック7号 千五百円	
北大山岳部報2号 千五百円	
山岳36の1、2、37の1 四百円	
山岳45 四百円	
山岳50 三百円	
山岳51 五百円	
山岳55 五百円	
山岳59 62 六千円	
会報133 150 (欠143、144) 五百円	
会報151 200 千五百円	
会報201 250 (欠243) 千五百円	
会報251 276 (欠274、275) 五百円	

針葉樹13号
その他登山とスキー、アルプ、岳人、山と溪谷、山、山日記、新ハイキングなど各20円〜30円
洋書

The Hidden Land, Bower

¥ 800

Sverdups Arctic Adventures Fairley. ¥ 500

Antarctic Command, Ronne ¥ 800

An Innocent on Everest, Izzad ¥ 1,000

Schackleton's Voyage, Chidey ¥ 100

Parsenn, Hoek ¥ 200

Der Schneeschuhlauf, Bahren ¥ 100

How to ski, Caulfield ¥ 200

An Australian Bird Book, Leach ¥ 300

Trees in Britain, Holbrook ¥ 200

The Childrens Garden ¥ 300

Men and Mountain, Ilin ¥ 200

Britains National parks ¥ 300

Mountain of Tartary, Shipton ¥ 1,000

Brazilian Adventure, Fleming ¥ 600

To the Third Pole, Dyhrenfurth ¥ 1,500

An Eccentric in the Alps, Clark ¥ 1,500

尾瀬でなめこを食べる会

文化の日も近い十一月一日、会員三浦多美子さんのいらっしゃる尾瀬第二長蔵小屋で、婦人懇談会主催の「なめこを食べる会」が開かれた。
尾瀬地方は二日ほど前に降雪があっ

図書室便り

昭45・10

図書受入報告

実業之日本社寄贈

(1)岡部牧夫著『木曾路と伊那』(ブルイガイドブック) 昭45

今井雄二氏寄贈

(1)今井雄二・今井喜美子著『続・心に山ありて』昭和45 同信社

定期刊行物受入報告

(部報・会報)

(1)山村民俗の会『あしなみ』No. 123

(45-10)

(2)福島県山岳連盟『福島山岳』No. 3

(3)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 41

(45-10)

(4)国立公園協会『国立公園』No. 249/250 (45-8/9)

(5)京都山岳会『京都山岳』No. 545

(45-10)

(6)『日本山岳会関西支部報』No. 21

(45-9)

(7)『日本職業スキー教師連盟』No. 4 (45-9)

(8)奥多摩山岳会『O.M.U.N.』No. 255 (45-9)

(6)東京野歩協会『野歩』No. 486 (45-10)

(7)東京池路山岳会『たふろ』1970年号

(11)都府連通信 45年度3号 (45-10)

(12)『登歩溪流会会報』770-778 (45-9)

(13)日本山岳協会『登山月報』No. 19

(45-10)

(14)日本登山協会『山と雪』No. 150

(45-10)

〔雑誌〕

(1)『アル』No. 152 (45-10)

(2)『岳人』No. 281 (45-11)

(3)『現代の探検』No. 2 (45-10)

(4)『HIKER』No. 181 (45-11)

(5)『山と溪谷』No. 386 (45-11)

(6)『毎日グラフ』8/30号『パイガ

に立つ69歳の根性)
(7)『毎日グラフ』9/27号(五大大陸の頂上に立つ)
(8)『毎日グラフ』10/25号(魅力の周辺に植村直己さん)
(9)8広羽清氏寄贈

〔報告書他〕

(1)日本山岳会東海支部『ベカルー』70

東南縦断登攀の記録

(2)岐阜県山岳連盟『ベトラヤ遠征報告書』70

(3)東京電機大学二部山岳部『台湾親善登山報告』69

(4)千葉大学ベトラヤ委員会『東ネパール術調査登山隊計画書』71

(5)岐阜県山岳連盟『Mt. Logan 遠征報告書』69

Journals Arrived in October 170

1. "Alpinismus", 1970-9.

2. "Die Alpen", No. 8-9, August-September 1970.

3. "Die Alpen", Jahrgang 46, Quartal 3.

4. "Der Bergsteiger", Jahrgang 37, Heft 9, September 1970.

5. "The Canterbury Mountain-er", Vol. 11, No. 38, 1968-69.

6. "La Montagne et alpinisme", Annee 96, No. 78, Juin 1970.

7. "Österreichischen Alpenvereiner", Jahrgang 25, Heft 7/8, Juli/August 1970.

8. "Rivista mensile", Anno 91, No. 7, Luglio 1970.

9. "U.I.A.A. Bulletin", No. 41, Aout 1970.

十月二十四日に開催しました第三回図書交換即売会に際しまして、左記の図書を購入、また寄贈いただきましたので報告いたします。

寄贈図書 () 内寄贈者名

1. 中井猛之進等著『上高地天然記念

- 物調査報告』刀江書院 昭和3
 2、John Whittaker 『The Course of Hannibal over the Alps』 2 vols. Print. by John Stockdale 1784 (以上 中屋健一氏)
 3、『日本山岳名著全集』あかね書房 昭和37〜38
 2、日本アルプスと秩父巡礼他
 6、伊那谷・木曾谷他
 9、山なみはるかに他
 10、泉を聴く他
 12、山の犠牲性他
 4、星野紀夫著『シルクロード五万キロ』芙蓉書房 昭和45
 5、瓜生卓造著『単独登攀』二見書房 昭和45
 6、岡田喜秋著『青春の山想』二見書房 昭和44 (以上深田久弥氏)
 7、『日本山岳名著全集 4 山行他』あかね書房 昭和45(山崎安治氏)
 8、山と溪谷社『山と溪谷総索引』31〜37号 昭和45 (藤島敏男氏)
 9、プロヴィエ・シャペル著 近藤等訳『山への初恋』新潮社 昭和31
 10、ジーン・イーヴァー著 福田実訳『白い砂漠』朝日新聞社 昭和31
 11、新田次郎著『アルプスの谷 アルプスの村』新潮社 昭和39 (以上高田義氏)
 12、Kyoto University. Fauna and Flora Research Society. 『Fauna and Flora of Nepal Himalaya. Land & Crops of Nepal Himalaya』1952-1953.
 13、薬師義美編『Selected Index to the Geographical Journal Vol. 1-125』1960.
 14、諏訪多栄蔵・薬師義美編『Contents & Index to the Himalayan Journal Vol. I-XXI』1960 (以上 田辺主計氏)
 16、『台湾山岳』No. 1, 3, 4
 17、『山と溪谷』42, 58, 65, 66, 67
- 69, 72
 18、『山』(梓書房) 1-8, 9, 2-2~12. (以上 神谷恭氏)
 19、『山』朋文堂200~206, 208~210. (村井米子氏)
 購入図書
 1、F.S.スマイス著伊藤洋平訳『キヤンプ・シックス』朋文堂 昭和34
 2、ジョゼフ・デセルヴァ著近藤等訳『未知の女神』白水社 昭和34
 3、ロバート・フォード著近藤等訳『赤いチベット』新潮社 昭和34
 4、荒川秀俊『日本気象学史』河出書房 昭和19
 5、山川黙著『原色高山植物』三省堂 昭和3
 6、冠松次郎『廊下と窓』三省堂 昭和15
 7、小林隆康『岩壁登高』博山房 昭和17
 8、テンジン述、アルマン記 井上勇訳『ヒマラヤの男テンジンの生きてきた道』紀伊国屋書店 昭和30
 9、日本山岳関西支部編『山岳研究講座I』朋文堂 昭和18
 10、R.G. Collobb 『A Dictionary of Mountaineering』 Blackie 1957.
 11、Amelia B. Eawards 『A Midsummer Ramble in the Dolomites』 George Routledge 1889. 図書委員会報告
 十月二十一日 午後七時 図書室
 山崎、荻野、大橋、武田、野上、伊藤、渡辺、岩淵、丸山、村石、川上、松村。
 図書交換即売会の値踏みを行った。
 (P. S. 17)
 各地に雪と紅葉の便りが聞えます。今年も年が迫ってきて、毎年のことながら『今年の暮は無事に越せるかしらん』と齡にふさわしからぬことをぶつぶつやいております。(東)

会務報告

十一月理事評議員会

- (4日午後6時半本会ルーム)
 △出席者 三田会長、吉沢副会長、藤井、中屋、大森、丹部、山崎、松永、宮下、神原、野上各理事、金坂、渡辺、公評議員、今井監事
 △議事
 ・会費納入の件 (山崎)
 従来会報は三年間会費未納者にも送付していたが、新入会員が増加し、それにもない会報の発送部数も増加したため、発送事務、および郵送料などの関係で、会報三〇六号から三年間会費未納者には発送を停止することにした。この件承認。
 ・新入会員登録の件 (藤井)
 新入会員登録申込み者に対する紹介者に関する件
 新入会員登録申込み者として本会役員評議員、支部長が一名当ることになっているが、この規定を今後厳守するようとする。
 ・支部長会議の件 (藤井)
 十二月十二日午後零時半から本会ルームで開催する。
 ・年次晩餐会の件 (山崎)
 当日婦人懇談会に受け、即売場の手つだいをしてもらう。また高頭仁兵衛氏の孫寿久氏より日本山嶽志百部を寄贈してもらったので、同氏を招待して貰いたい。むね越後支部長より要望あり、この件了承する。
 ・文書規定の件 (藤井)
 原案をコピーし各理事にいま一度検討してもらい、次回理事会で決定する。
 ・賛助会員の件 (藤井)
 定款の規定に従い、これを活用するため、具体案を再検討したい。
 ・エベレスト国際隊の件 (藤井)
- 十月の理事会で小西、植村の二氏を内定したが、毎日新聞社ではデイレクターの隊長と近く契約をとりかわすことになった。小西、植村の二名は十一月二十七日トレーニングのため欧州アルプスへ出発する。
 ・自然保護委員の件 (中屋)
 吉阪隆正氏が今回厚生省の自然保護委員となったので、会の自然保護委員になってもらう。
 ・ガルフ地図の件 (吉沢)
 スイス財団で十五万分の一のガルフの地図を作ったが、インドで発売禁止となった。丸善でこれを知らず百部注文到着したので、JACで会員に五分引で発売することにした。定価は二千九百円である。この件承認。
 ・K2模型通関の件 (神原)
 イタリア館から会へ寄贈されることになっているK2の模型は通関がすんでいないので、通関料一万円を会で負担したい。この件承認。
 ・井上所長慰勞金の件 (山崎)
 文部省登山研修所の井上所長が東海大体育学部主任教授に栄転され後任は西野間幸雄氏に変わった。井上所長の慰勞金を日山協と山岳会が各一万円出したとと研修所運営委員会から要望があった。この件承認。なお慰勞金は十一月十四日虎ノ門晩餐軒で開く。
 ・全日本学生山岳連盟の件 (宮下)
 十一月二十九日の日山協理事会上に提案する。
 △報告
 ・図書交換即売会の件 (野上)
 十月二十四日ルームで開き盛会であった。売り上げは十万三千七百七十円あり、この五分を図書基金として会へ寄贈してもらった。またネクタイピン、依託図書など六万六千円売れた。
 ・P29の遭難について (丹部)
 登頂後の遭難について会として弔電を打った。

・医療関係報告 (大森)
 十月十二日日本体力医学学会にエベレストの医療の報告を行なった。
 ・婦人懇談会・集金報告 (山崎)
 十一月一日を中心とした連休に婦人懇談会では尾瀬でナメコを喰べる会を開いた。福島からも参加者があり、女性十名、男性三名で楽しい集りであった。
 集金委員会は十月二十八日第二六五回小集会を開き、女子登山隊のアンナブルナ三峰と関西登高会のダウラギリ六峰の報告があった。

正誤
会報三〇四号に掲載の昭和45年度除籍
者名簿中佐々木健二氏から会費の納入
があったので同名簿から削除します。
ルーム日誌(45年10月)

2日(金) 北大山岳部山の会
6日(火) エベレスト装備関係集会所
7日(水) 理事評議員会
13日(火) 独協大学山岳部集会
14日(水) 冠松次郎氏追悼会
19日(月) 指導研究委員会
21日(水) 図書委員会
24日(土) 図書交換会
常務理事会
28日(水) 第二六五回小集会 アンナ
ブルナIII峰登頂報告会 女
子登攀クラブ
ダウラギリVI峰登頂報告会
関西登高会
29日(木) 自然保護委員会
31日(土) 学生部指導委員会
十月中来客者 三五二名

忘年会のお知らせ 十二月二十三日(水) 午後六時三十分から本会ルームで例年のように忘年会を行ないます。会費四百円(軽食付)交換プレゼント百円程度のものに必ず手紙(無記名)をつけてお持ち下さい。御出席下さる方は準備の都合がありますので十二月十九日(土)までルームにお知らせ下さい。

(集委員会・婦人懇談会主催)
あとがき 本会前書記、終身会員永原輝雄氏が十二月一日逝去された。謹んで哀悼の意を表します。今年もあと僅か、来年もよろしく。(山崎)

昭和四十五年十二月十日発行
東京都千代田区神田錦町
三十三 向井ビル
発行所 社団法人 日本山岳会
編集代表 山崎安治
(293) 七四四一
振替口座東京四八二九番
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (251号~300号) 金 700 円也
送 料 別 受 け 金 120 円也

ナカバヤシ株式会社

東京店・文京区水道2~15, 電話(943) 0311 (代表)
大阪店・都島区相生町7, 電話(352) 3491 (代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15, 電話(731) 7331 (代表)
工場: 大阪工場(堺市), 東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましたよ!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部(専門取扱営業所)
東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
電話 (352) 1556・1557

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

新刊

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖 <A変型208頁> 定価3,600円
日本列島の北から南までのさまざまな風景が著者の淡彩の筆によって、いきいきと描き出されているスケッチ集

私には後にも先にもたった一つの自分の山の本がある。
「霧氷園」、1941年版。先生の装幀がこの本を飾った。内容はつまらなくても、おかげでそれは生涯の記念碑となった。これも図々しく、お人柄に甘えて、ただで描いていただいたのである。絵に添えた先生の文章にも定評がある。力まず、てらわず、淡々として、しかも山の心に通じ、山の心をみごとに語っている。半世紀にわたる先生の山旅の収獲の一部が、いまこの本にまとめられた。これこそ、ほんとうに山にうちこんだ、ほんとうの山の画伯のすばらしい贈りものではないだろうか。

袋一平・山のアルバムより――

新刊 山に忘れたパイプ

藤島敏男著――<菊判584頁>定価2,500円
登山半世紀をはるかに越える著者のよき時代の静かだった山旅から現在までの山登りの紀行を中心に収録。――

本書の内容は、随想、紀行、追想、訳章、書評、山のたより、登山譚、の七つからなっている。その一つ一つをここに説明する余裕はないが、大正期からつい最近まで、主として日本山岳会の刊行物に発表されたものが大部分を占め……著者は「だいたい私は我儘者だから、依頼だの注文に応じて文を綴るのは、平にご勘弁を」と言っているように、本書の大部分を占める文章は、書きたいことを気のむいた時に書いたもので、それだけに、どの一つをとって見ても、この著者ならではの感を強く受けるものである。

望月達夫・藤島さんの本より――

登山・スキー用具専門店

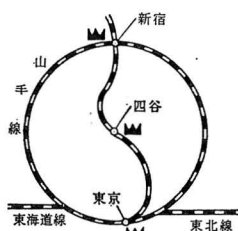
●買いやすい
山の店

山の店

●北へ来たら
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



かたるぐンテイ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具
プライス
リスト進呈

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区宮根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
神戸店・生田区北長狭通り3-8-19 (39) 4 1 2 6
神戸店・生田区三ノ宮町1-32-1 (33) 5 2 5 1
福岡店・須崎町 1-4 (28) 3 4 4 0

